

富士市市民部まちづくり課の取り組み（生涯学習指導者研修事業：若者の学びを支える公民館）

|       |                                                                                                   |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2017-05-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 鈴木, 剛<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.14945/00010186">https://doi.org/10.14945/00010186</a>                 |

## 基調報告 2

## 富士市市民部まちづくり課の取り組み

鈴木 剛（富士市市民部まちづくり課）

私は市役所勤務19年目で、最初は林政課、次に交通安全の担当課、その後に秘書課、そして現在のまちづくり課は6年目です。社会教育担当や教育委員会には在籍したことがないので、皆さんにとって当たり前の話をしてしまうかも知れませんが、ご容赦ください。

まちづくり課は、他の市町村では都市計画や建築関係のことを指す場合が多いですが、富士市の場合は人によるまちづくり、コミュニティによるまちづくりを担当しています。まちづくり課で支援しているのは、まちづくり活動、つまり地域の自治に関することです。住民主体で地域を運営していくための自主活動を持続可能にするために支援していくことが仕事です。

今回いただいたテーマに世代間交流という言葉があったので、市の施策としていろいろな世代にアプローチする人材育成と、それらを交流させるアクセスポイントを作ることで人をつないでいく世代間交流の仕掛けも併せて説明したいと思います。その取り組みの中で、2年前（2015年）から市立高校と手を組んで行っていることを具体的にお話ししたいと思います。

## ■富士市を取り巻く現状

少し、富士市の現状について知っていただきたいと思います。富士市は静岡県の東部にあり、あまり知られていないかもしれませんが、県内第3の人口があり、特例市です。25万6000人の人口を擁し、世帯数が10万強です。高齢化率（65歳以上の割合）が25.66%、少子化率（若年人口の割合）は13.35%で、県内ではまだ比較的高齢化率は低い方に入るかと思います。富士市の特徴としては、地域コミュニティの活動がかなり盛んということです。昭和41年の2市1町の合併以降、活発に取り組まれてきて、特に小学校区単位でコミュニティ活動が盛んに行われています。例えば体育祭、文化祭、お祭り、清掃活動、美化活動が小学校区単位はもちろんのこと、自治会単位などいろいろな単位で行われています。年間を通じて、各地でイベントが行われているまちという印象もあります。

一番身近な自治組織であるコミュニティは、富士市では町内会もしくは区と呼ばれており、市内に389存在しています。加入率が約84%で、静岡県内のこのぐらいの規模の都市では高い方かと思います。ですので、町内会の組織はしっかりしています。それをもう少し拡大すると、地区という単位になり、小学校区を範囲に26地区あります。この範囲でコミュニティの活動が盛んに行われており、さまざまな分野の団体や役割を持った推進員が20～30ぐらい地区内で活動する形になっています。

市が設置しているまちづくりセンターは平成20年まで公民館だったのですが、市民に軸足を置いた市政という当時の市長の意向もあり、市長部局へ移ってまちづくりセンターに変わりました。これが小学校区単位に26カ所あります。図1が26地区の区割りです。遠藤先生から話があったとおり、富士市は、海から富士山の麓まで南北にかなり高低差があり、東西にも長い地区になっ

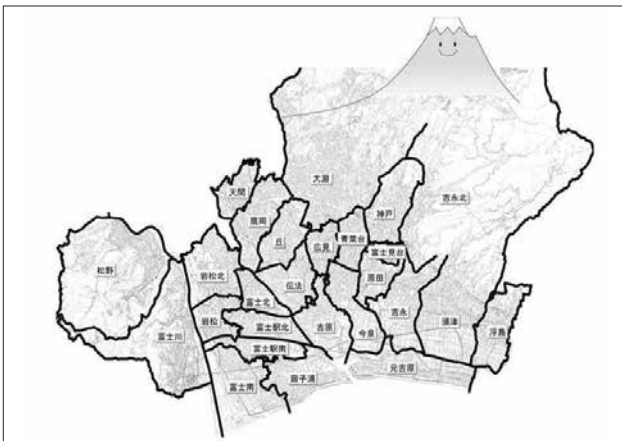


図1 富士市26地区の区割り

ています。ですので、地区それぞれの魅力や特性があります。

地区内にはさまざまな団体が活躍していて、小学校区単位に町内会長が集まる連合町内会があったり、これは富士市独自の団体ですが、生涯学習推進会があります。最初は青少年健全育成を目的に立ち上がった団体ですが、今は交通安全や文化活動など幅広く活動しています。更には、福祉関係やPTA、子ども会あるいは老人クラブ、交通安全や花の会など多種多様な団体が小学校区単位で活動しています。

これらの団体をつなぐ役割として、まちづくり協議会が26地区すべてに設置されています。もともと個々の活動は活発だったのですが、これからの時代を考えたときに、個々の活動だけではなくて、手をつないで地区単位で同じ目標を持って活動するための仕組みが必要と考え、まちづくり協議会という仕組みを市が提案し、平成26年度にすべての地区に設置されています。このまちづくり協議会が、市役所プランに協力し、高校生を受け入れて取り組みを進めています。

今年（2016年）11月1日、市制記念50周年の記念日に、富士市まちづくり条例が制定され、この条例にもこの協議会が位置づけられています。ですので、地区を代表する組織として市もしっかり支援していく形になっており、現在はこのまちづくり協議会の事務局をまちづくりセンターの職員が担う形になっています。将来的には住民主体の事務局体制に移行していきたいと考えておりますが、現状は市の職員が事務局として一緒に取り組んでいます。

図2はまちづくり協議会のイメージです。さまざまな団体が手をつないで、代表者が集まって物事を決めるような場や協力しながら動く場をつくりながら、個々の活動は生かすけれども、地域全体で連携して、一緒にできることはやっていこうという相互協力の関係をつくっていくのがまちづくり協議会のイメージになると思います。活動拠点は、まちづくりセンターです。26地区すべてに設置されていて、市の職員が正規3人、臨時2～3人配置されています。役割は、発行事務などの市民サービスコーナー、社会教育講座などの講座開催、そこから生まれた自主グループ活動への支援や、まちづくり協議会事務局として地区活動へのサポートなどがあります。

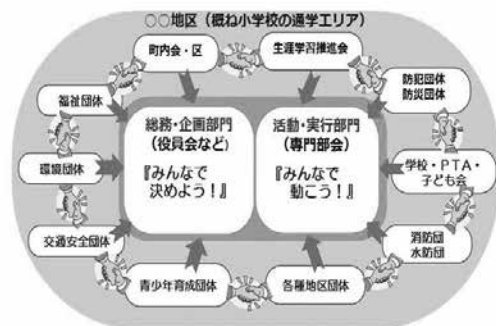


図2 まちづくり協議会のイメージ

## ■地域の力こぶ増進計画

現在進めている「地域の力こぶ増進計画」は、地区単位のコミュニティを活性化して持続可能にしているための計画です。この計画をつくるに当たり、やはり活発な活動でも少しずつ問題・課題が出てきました。少しデータの話をする、と、ご多分に漏れず人口減少、少子高齢、ライフスタイルの多様化の中で、コミュニティ意識が下がってきています。

図3は、昭和50年以降の人口と世帯数のグラフです。平成10年ごろまでずっと右肩上がりであり人口も世帯数も増えていて、人口の波は少し緩やかになっていきますが、世帯数の波は相変わらず右肩上がりの状態です。平成20年に富士川町と合併したので、人口と世帯数がぼんと上がっていますが、それを機に人口は減少に入っています。世帯数は相変わらずの伸びです。ということは、核家族や1人でお住まいになっている人が増えてきている状況が見て取れます。

人口減少のペースも、総合計画で予想していたのが点線なのですが、それよりも速いスピードで落ちてきています（図4）。年代別の人口分布を並

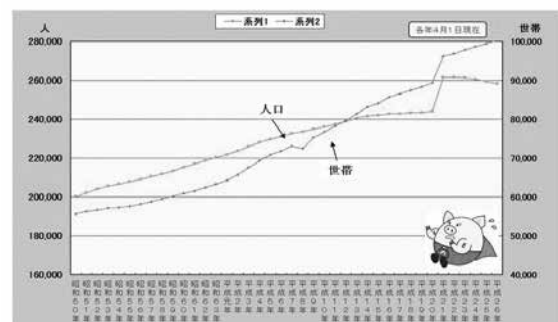


図3 人口と世帯数

べてみると、平成16年（図5）、平成21年（図6）、平成28年（図7）で人口の構造が変わってきています。大きな人口のピークとしては団塊世代と、40代ぐらい団塊ジュニア世代の二つがありますが、これからどんどん高齢化しています。一方、若年層が減ってきているので、人口構造のバランスが悪くなって、それが一番の問題になってくると捉えています。もちろん人口が多い年代が、高齢になっても元気で地域の活動に参加してくれば一番いいのですが、社会保障などのお金がどんどん増えていくことが予想されていますので、今後、どうしていくかという課題もあると思います。

もう少しミクロの視点で見るために、26地区の人口動態を平成16、21、28年で並べてみました（図8）。26地区中17地区がこの11年ほどで減少傾向になっています。6地区はまだ人口が増加しているエリアです。まだ分譲地やマンションがどんどんできて人口が増え続けているエリアもあります。逆に言うと、世帯数はほぼ全地区で増加傾向となっています（図9）。富士見台地区は世帯数も既に落ち始めています。これからいろいろな地区で、世帯数の方も落ちてくる時代になってくると予想されます。

こうして人口減少、人口構造の変化、ライフスタイルの多様化が進む中、実際に地域の皆さんから聞かれるのが、役員のなり手不足、事業のマンネリ化、さらには活動のやらされ感があって、何のためにしているのか分からないという声が出たり、全体としてコミュニティ意識がどんどん低下している印象を受けます。こういうことが進んでしまうと、これから拡大が予想されるさまざまな地域課題に対応できないので、富士市としては今の活発な活動をいかに将来につなげていくかという問題意識の下、「地域の力こぶ増進計画」を平成24年に策定しました。ねらいとしては持続可能な地域コミュニティづくりを目指したものです。

計画期間は平成24～28年度で、ちょうど今年（2016年）が最終年度です。平成22、23年の2カ年かけて計画を作り、関係団体や関係機関からさまざまな意見をいただいて、この計画では、持続可能な地域コミュニティづくりに向けて、三つの視点が必要だろうと結論づけて取り組みを進めています。

一つ目が活動実施体制です。まちづく

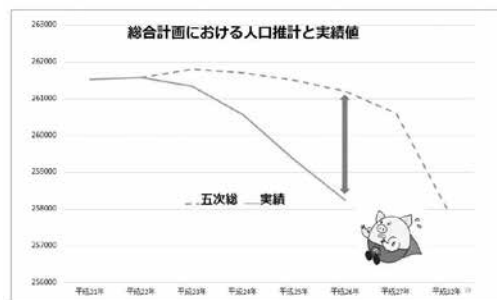


図4 総合計画における人口推計と実績値

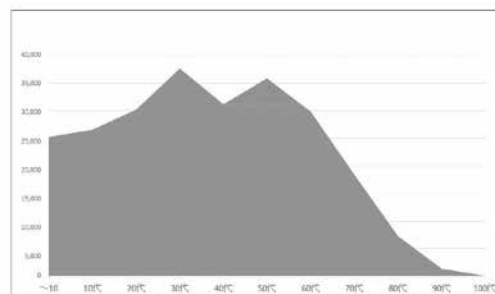


図5 年代別人口分布図（平成16年）

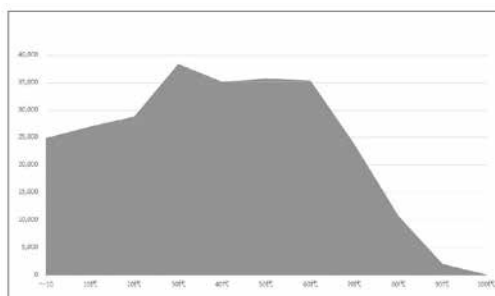


図6 年代別人口分布図（平成21年）

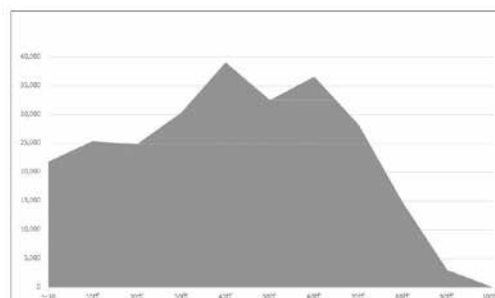


図7 年代別人口分布図（平成28年）

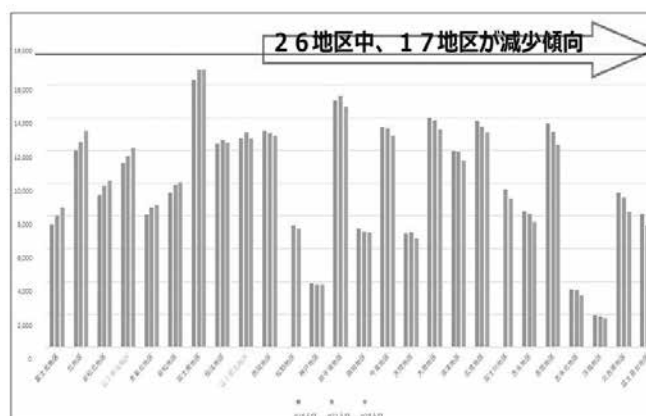


図8 地区別人口動態（平成16年、平成21年、平成28年）

り協議会のような仕組みやそれを支える計画、あるいは条例などを作って支えていく仕組みの面です。二つ目に、やはりまちづくりは人づくりですので、人材をいかに発掘、育成し、つなげていくかという視点です。三つ目は、そういった仕組みと人がうまく連動して回っていきけるような活動の場・連携です。場の提供や施設の運営、あるいはさまざまな主体が交流する場をつくることです。そのような三つの視点から課題を捉えて取り組みを進めてきました。

計画の体系図が図10です。三つの視点から、これまでさまざまな取り組みを進めてきました。まちづくり協議会の設立や、地区の将来のビジョンを描いたまちづくり行動計画の策定、更には、それを支えていくための条例が現在できています。また、これらに合わせていろいろな人材育成や連携の場をつくっています。

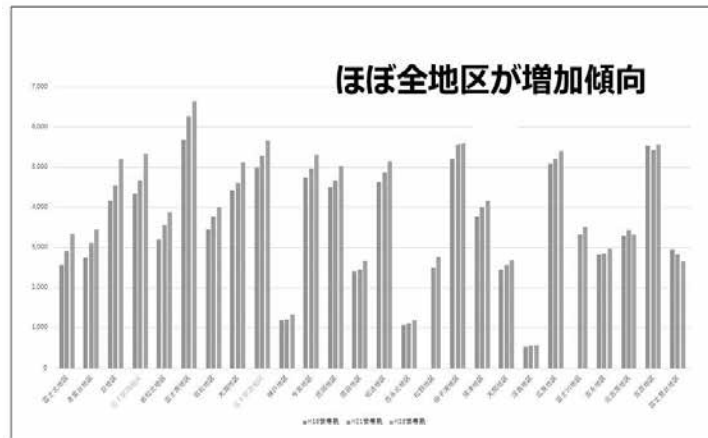


図9 地区別世帯数動態(平成16年、平成21年、平成28年)

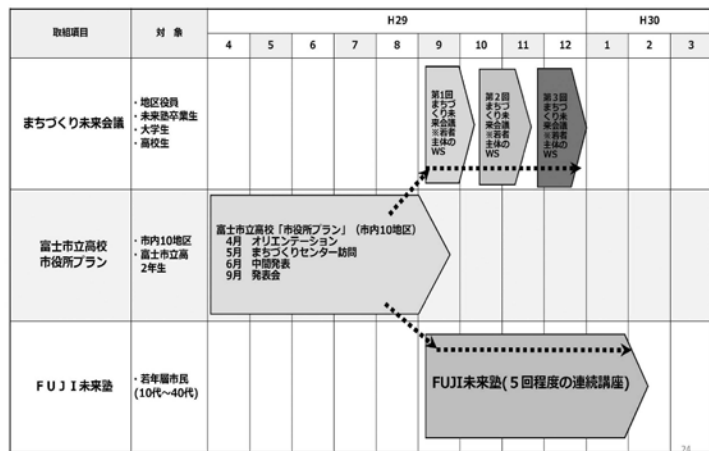


図10 計画体系図

## ■次代に向けた「ひとづくり」

ここからが本題です。次代に向けた「ひとづくり」ということで、市立高校と協働で取り組んでいる人材育成についてお話ししたいと思います。まちづくりの核になるのは「人」です。物事を動かしているのは「人と人のつながり」であって、コミュニティであって、これが一番大事な部分になると思います。

人口減少・少子高齢化で人が減り地域力が減退してしまうと言ってもなかなかイメージしづらいと思うので、図で表現しますと、例えば人口5人のまちがあったとします(図11)。すると、人のつながりは10通りあります。しかし、高齢化などで人口が4人に減ったとします。そうすると、人口は5人から4人に2割減るのですが、人と人のつながりは6通りに減り、4割減ってしまう計算になります。これはコミュニティレベルでとても大きな問題だと思っています。

わかりやすいように少ない数字で示していますが、こうなった時に今までやっていた活動の負担を6通りのつながりで回さなければならなくなるということは、残された人の負担が増加してしまい、また人口が減り、負担が増え、といった形で負のスパイラル(spiral)に陥る可能性があるわけです。ですので、市もどうしていくかを考えなければならないし、地域の皆さんの中で主体的に考えていかなければならない時代

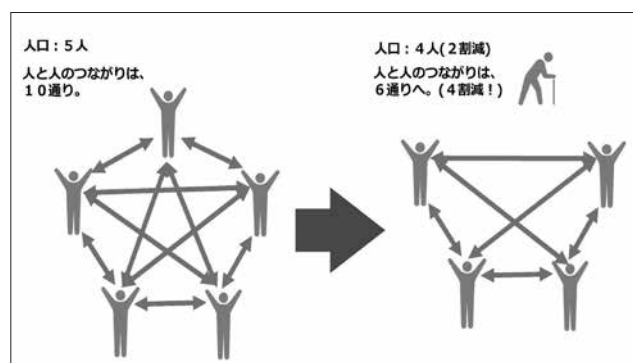


図11 人と人のつながりイメージ



になってきていると思います。

そんな中で、残念な結果が出ています。世論調査で、まちづくりに市民が参加しているかを問う調査をしたところ、「まちづくりに市民が参加していると思うか」の設問に対して、そう思わない人の割合が増えています（図12）。左側の2本のグラフは、まちづくりに参加していると思う人の割合の平成22年と26年の比較で、右側の2本が参加していない人の割合の比較です。平成22年は、全体としてまちづくりに参加し

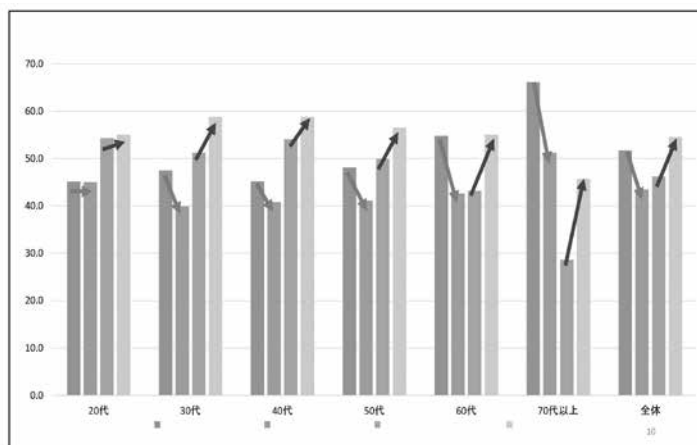


図12 世論調査「まちづくりに市民が参加していると思うか」平成22年・平成26年の比較

ている層が5割を超えていたのですが、この5年で逆転してしまって、参加していない層の方が増えてしまっています。これは結構問題だと思っていて、速効性がある取り組みも必要ですし、長いスパンで変えていく仕掛けも必要だということで、取り組んでいます。

そこで、持続可能な地域コミュニティづくりに向けて、「ひとづくり」の観点から市は何ができるのかを、われわれは常に考えて取り組んでいます。その中の一つの取り組みとして、市立高校と組ませていただいているわけです。

具体的には、当事者意識を持って関わる人の数を増やすことです。まちづくりのこと、自治のこと、自分たちの地域のことを自分のこととして捉える人がいかに増やしていけるかです。地域の人たちがそういう人たちを育てていくのは当然ですが、市としてもどう仕掛けて、増やして、つなげていけるかを意識して、施策に取り組んでいるところです。

速効性がある施策としてはまず、まちづくり協議会の役員の皆さんのモチベーションが上がるような取り組みです。具体的には今日は違う観点なのでお話ししませんが、地区間の会長たちが情報共有する場をたくさんついたり、市の担当者と協議会の役員が情報交換して、必要な取り組みについて意見を出したり、まちづくり協議会の活動を紹介するようなPRをしながらモチベーション（motivation）を上げていただいて、地域の中で地域の人材をつくる場所につなげていってほしいという思いがあります。

もう一つが、次代を担う若者の当事者意識の向上です。先ほどのまちづくりへの参加意識の世論調査でも、やはり若者層の参加意識が下がっています。これは長いスパンで見ると大変な問題だと思うので、じっくり腰を据えて取り組むためにも市立高校と協働で取り組んでいます。

市立高校の市役所プランにおける協働の取り組みのほか、先ほども少し出しましたが、FUJI未来塾という10～40代ぐらいの社会人・学生をターゲットにした人材育成塾、さらにはまちづくり未来会議といって高校生、大学生、社会人と協議会の人たちをつなぐような仕掛けもしています。個々の層にも仕掛けながら、個々をつなぐようなアクセスポイントとして世代間交流の場をつくって、活性化につなげたいという意図があります。

まず、FUJI未来塾についてです。地区単位ではなくて、市全域の人材育成塾になっていて、まちの未来を考え、このまちのために自分たちができることをテーマに取り組んでいる連続講座です。講師に、伊豆でドットツリープロジェクト（Dot tree project）を始めとした地域活性化の取り組みを行っているNPOサプライズの飯倉清太代表理事をお呼びしています。今年（2016年）は2期目として、取り組みを進めています。第1期は21人の参加で、高校生から大学生、社会人まで平均年齢40代半ばの人たちが集まっています。今年（2016年）の第2期は17人の参加です。

あまり地区や地縁組織は意識しないで、富士市の未来を考えたときに自分たちは活性化に向けて何がで

きるのかを、5回の連続講座の中でプランを作って発表してもらいます。この講座の目的は発表するだけでなく、活動につなげることです。こういう人材育成塾は大体、プランをつくって終わってしまうのですが、この講座は違って、終わったら即活動につなげたり、あるいは、講座の間にトライアルで活動してみて、それを発表する取り組みをしています。

企画の実現ということでは、第1期生の活動は、高校生がリーダーになったチームで、富士市立中央図書館と組んでビブリオバトルを行ったり、大学生が就職活動に入る前に職業観を学ぶために、OBの社会人と呼んでお話を聞いて交流するような「職しごとカフェ」を3回ぐらい開催しているチームがあります。他にも、福祉施設を慰問するようなイベントや、ボランティアしたい人とボランティアを受け入れたい側の施設をつなぐような具体的な動きをしているチームがあります。

活動して終わりではなく、さらにつなげるような仕掛けもしていて、第2期FUJI未来塾では、第1期生の5チームのリーダーをティーチングアドバイザー（teaching adviser）として招き、第2期生の3チームにアドバイザーとして入ってもらっています。それから、まちづくり未来会議にも参加してもらって、大人の立場から高校生、大学生と意見交換をしてもらっています。

次に、まちづくり未来会議です。まちづくり未来会議とは、地域の力こぶ増進計画が今年（2016年）で最終年度になるので、この先どういう市の支援の在り方があった方がいいのかを考えるために、若者の意見を取り入れる目的がありました。さらに、せっかくやるのなら、当事者意識を持ってもらう仕掛けにしたいので、若者の視点で地区のまちづくり活動を考えるための意見交換の場として、連続3回で開催することにしました。この3回の中で出てきた意見は、計画の今後の方向性に反映していこうと考えています。

9月に始まって、現在、11月の2回目が終わったところで、最終回の12月12日に、若者たちから提言をいただく形になっています。会場は市立高校で、参加者は市立高校生10名ぐらい、常葉大生5名ぐらい、FUJI未来塾第1期生5名ぐらいの20人で行います。

第1回は若者たちだけで、グループごとに決められたテーマについて、地区まちづくり活動に関する仮説を立てています。まちづくり活動はどんなことをしているのか、会長になったら何をするのか、何をしてみたいか、地区まちづくり活動の印象はどうか、参加を増やすには何が必要かということ、知らないままに若者たち目線で話し合ってもらい、発表して全員で共有してもらいました。

第2回は、第1回の参加者の中から「実際にまちづくり協議会の会長さんたちの声を聞いてみたい」という声が上がリ、実は第3回に会長たちを呼んで講評してもらおうと思っていたのですが、構成を変えて第2回に交流してもらうことにしました。第2回まちづくり未来会議への参加を26地区の会長に呼び掛けたところ、3人の会長が手を挙げてくださって、当日来てくださいました。この日は、高校生たちは、どんなことを聞きたいかを最初に考えた後、3人の会長を囲んで意見交換をしました。最後に、地区まちづくり活動は何のためにやっているのか、どんな意義があるのかを確認、共有して第2回は終わりました。

第3回は、前の2回を踏まえて、若者たちが将来に向けてできること、あるいは市がどんなことができるのかを提案してもらう場にしたいと考えています。

最後に、市役所プランによって地域に起こったことを紹介したいと思います。「てんまんじゅう」プロジェクトは昨年（2015年）、実際に市役所プランの高校生の提案から天間地区で生まれたプロジェクトです。きっかけは昨年（2015年）9月の市役所プランの発表会で、高校生のあるチームが天間地区にオリジナルスイーツを作る企画を提案しました。なぜかという、天間地区の魅力や資源を考えたときに、天間地区は地区内に大きな天満宮があり、そこから天間という地名にもなっています。それと、まちづくりの軸として、天満宮にちなんだ「梅の里づくり」にずっと取り組んできています。高校生はそれを捉えて、梅の花をモチーフにした「てんまんじゅう」というオリジナルスイーツを作って活性化につなげてはどうかという提案をしました。要は、地域の資源と高校生のアイデアが掛け合わされた形だと思います。

これを聞いてプランで終わってしまう地区が多い中、天間地区の皆さんは実際に取り組んでみることにしました。今年（2016年）2月に、天間地区を代表する大きなお祭り「梅まつり」があったのですが、そ

ここでお披露目に向けて昨年（2015年）9月以降、市立高校と地区の皆さんと一緒に取り組むことになり、高校の調理室などを使って試作を重ねて、箱も五角形にすることにしました。実際に販売した2月の天間地区の梅まつりでは、1時間で完売してしまう盛況ぶり、当日は市長にも見てもらいましたし、この取り組み自体が地元新聞の1面を飾りました。

何よりすごいのがこのてんまんじゅうをすることにより、天間地区にプロジェクトチームが新たに立ち上がり、今もそうですが、女性部を中心に毎月、調理室に集まって、てんまんじゅうを育てていく動きにつながったのです。これは大きなインパクトで、今年（2016年）の市役所プランの中で、青葉台地区という高台の地区があって茶畑がきれいな地区なのですが、高校生の中からお茶を使ったクッキーを作れないかという話が出て、来年（2017年）は地区にとって20周年の年なので、そこで商品化して売ろうという動きにもつながっています。ですので、高校生の意見が地域の中で求められていることを実感しますし、それを何とか生かして、自分たちの地区に落とし込もうという大人への刺激にもつながっていると感じます。

最後に、全体像を確認していただきたいと思い、図10に表してみました。市立高校生を軸に考えると、4月に市役所プランが始まって、オリエンテーション、まちづくりセンター訪問、6月の中間発表、9月の発表会という形で、高校生たちが半年をかけて市役所プランをまちづくり協議会やまちづくりセンターと一緒に取り組んで進めた後、続けて高校生が入ってきやすいように、FUJI未来塾を9月にスタートしています。ですので、去年（2015年）の第1期、今年（2016年）の第2期も高校生が1人ずつ参加していますし、それを踏まえた上で、今年度のまちづくり未来会議も起こしています。

これまでの成果を元に、地域を知った高校生たちが高校生だけで考えるのではなく、大人や大学生などと世代を超えて話し合う場を設けています。また、そのような個々のプロジェクトをつないでいくように、全体像をデザインしていくことが大事だと思います。これについては来年度（2017年度）以降も同様の仕掛けで、長いスパンにはなるとは思いますが、継続的に若者の当事者意識を高めていきたいと考えています。

このように、今後も世代間交流の場を増やしていきたいとは考えていますが、ここ数年で見えてきたことは、地区の役員と若者世代は相思相愛関係だと強く思います。地区の役員側は伝えたいので「こういう活動を一生懸命やっているから、ぜひ参加してほしい」と話しかけますし、若者たち（特に高校生）は知らないのを知りたいという関係性があると思います。そうした場をつくることで、まちづくり活動は何のためにしているのか、誰のためにしているのか、どんなことをしているのかということを、世代を超えて共有できるわけです。こういう場をつくることは大事だということに気づきました。

そして、お互いの「知らなかった!」を埋めることになりますので、若者の視点は地区役員の刺激になるし、若者にとっては地域が自分たちを求めていると強く感じる気づきの機会になると考えています。世代間交流は、地域にとっても若者にとってもメリットがある仕掛けになると思うので、個々の世代層による仕掛けも必要ですが、それぞれをつなぐ仕掛けをこれからも続けていきたいと思っています。

課題として見えてきたのは、そういう意識を持った若者たちがすぐに現場サイドの地区内で活躍の場があるかというとなかなか難しいことです。その地に住んでいる人たちがつくっている組織だと、何かしら団体に所属したりして活動に参加していることが多く、意識を持った若者がいきなり入ってきてもなかなか受け入れられないことがあるので、そこを何かしらつなぐような仕掛けが今後できないか、市としても考えているところです。

今お話ししてきたことは、われわれまちづくり課で取り組んでいる地域づくりの観点からのひとづくりです。各層の人材育成も大事ですが、そこをつなぐようなアクセスポイントをつくることも意識して仕掛けていくところです。

最後になりますが、私も地域の一員ですし、結局のところ、まちづくりの主役はひとりひとりだろうと考えています。われわれ自身も地域のことを自分事として気にしながら、地域活動に参画していかなければならないという思いを日々強く感じているところです。